

浜田市議会議長 原田義則様

議員名 上野 茂



## 調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

### 記

1. 期 間 平成27年5月20日(水)～5月21日(木)

2. 視察又は訪問先

① 広島市立祇園東中学校

② 高知県越知町立越智中学校

3. 参加者 佐々木豊治 岡本正友 野藤薫 (①のみ) 岡野克俊  
柳楽真智子 上野茂

4. 調査経費 13,722円

5. 調査研究活動の概要 別紙

#### [広島市立祇園東中学校の取組概要]

祇園東中学校は生徒数659名で、教職員49名、一つの魅力は自校給食で、全教室にエアコンを完備している。

10年前、校内が荒れていたことから、当時の校長を中心とした教職員が一斉授業から脱却し、コの字型の座席や4人一組の小グループの学習スタイルの取り組み、学力向上や豊かな人間性の育成、まちぐるみによる教育の推進に成果をあげている。その結果、祇園東中学校で学んだことを誇りに思っている生徒、満足している保護者が95%を突破している。

#### [校長の聞き取りから]

・めざす生徒像として、学び合い高めあうこと楽しむ生徒、心身ともに健康でつながりを大切にする生徒、自主の思いと感謝の思いを大切にする生徒。めざす学校像として、つながりあう豊か  
かい場づくりを行う。



- ・祇園東中学校といえば生徒の声、3年間通し挨拶をしっかりとやる。
  - ・すべての生徒の学びをめざした、夢中になる学びの授業づくり。一番時間が長い授業で子どもたちが変わる。
  - ・めざす授業としては、一斉授業からの脱却として、コの字型の座席で顔を見て語り合う。この背景には10年前学校が荒れていたことがあり、暴走族の拠点になったり、授業中徘徊をする生徒などもいた。どうしたら本来の姿に戻すことができるのか悩んだ末にいきついたのが、コの字型の座席スタイルだった。学校組織をあげての改革だった。顔が見えるから安心感もある。また、学習スタイルとして小グループの4人一組の班を作っている。6人では距離がある。考えを聞くことや仲間に伝えることで理解できる。わからないことが言えることが大切。
  - ・めざす授業を実現するため、全教員が年1回授業を公開し、研究協議を行っている。月1回は授業公開を行っている。
  - ・学びの授業を実現するため、授業中扉を開く、生活階での見守り、時間を守るなど基本的ルールの徹底。(ノーチャイム) 整理整頓や服装も。
  - ・取り組みの成果としては、仲間を大切にすることが増え、心の柔らかい子供たちの増加、自尊感情の高い子供たちの増加など。QU検査の学校満足度が全国平均は37%だが、当校では58%。学校評価アンケートの「自分には良いと黒があります」の間に、「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせると72%と高い数字となっている。県も高い数字となっている。
- 授業中、人の考えを聴こうとしているでは92%となっている。全国は67%で、これは話を聞くコの字型や4人グループの成果である。基礎基本定着状況調査では全教科で県平均を超えた。
- ・生徒指導上の課題として26年度の不登校は9名、暴力行為は1件、いじめは0だった。
  - ・子どもたちが大人になって自立できる支援をする。何か起きたときは教職員が全員で即動く。組織として大切なこと。
  - ・良い学校ではないが、教職員や生徒は良くしようと思っているから「ありがとう」の言葉が生まれる。先生が「何々しなさい」では子どもの自主性は生まれない。一緒になって作る、一緒になって汗をかくことが大事。

#### [感想]

大規模校でありながらみんなで学校を創る。校長先生は、ここはしてくれる学校ではありませんと言われた。学びを中心に生徒と先生でつくる学校。週の後半疲れるので掃除をしない日を設けている。土、日の遠征試合などで疲れるため月曜日は5時に帰らす。ノーチャイムで時間の管理を身におぼえこませる。部活など地域の方の無償ボランティアで多忙な先生の時間を浮かす。地域の運動会などの行事、職場体験などを通じて、生徒・保護者・地域・学校が強く結ばれていると感じた。そうした努力、工夫を重ねて、祇園東中学校で学んだことを誇りに思っている生徒、満足している保護者が95%超していることに感動した。

### 【高知県越知町立越智中学校の取組み概要】

高知県中央の山間部、清流日本一の仁淀川に臨む越知中学校は5年前から学力向上の取組を進めている。

学校のモットーは「個人の能力差、家庭や地域の能力差、教員の経験や力量の差によって学力差を生まない」ことで、校長を中心としたサポートや評価体制の下で学校が一丸となり、授業づくりを進めている。

同校がまず取り組んだのは、「教師が子どもと向き合う時間を増やす」ための教務改革で、役割分担を徹底し職員会議の縮減や学校行事の効率化を図り、年間100時間の授業時間増をめざした。次に学力向上の肝となる授業改革では、「考える力」を伸ばすため、生徒同士が考え方を共有できる班活動や発表を積極的に取り入れた。

授業は①課題の提示②自力解決③班活動・情報の共有④振り返り で構成されており、それぞれの項目は細かく時間配分され、グループワークや振り返りの時間を十分に確保する授業づくりが進められている。

定期試験の出題形式や難易度を統一し、理解度を数値で分析できるようにした結果、他教科との比較も可能となり、教員同士が刺激し合う効果も生まれている。「点数が低いのは生徒のせいではなく指導のせい」とされ、まず教員にその意識を持たせた。

同校は2010年度までの全国学力テストでは、全国平均を下回る結果が続いていたが13年度の3年生の結果は国語、数学とも急上昇し、特に数学Bでは30ポイント以上も上昇している。指導方法改善による学力を向上させる同校の取組に、全国から視察が相次いでいる。

### 【校長先生の聞き取りから】

・学店の結果は全国平均を下回り、平成24年に赴任して来たときには「学力が低い」と感じた。小学校も低かった。

現在はすべて100を上回る。

・越知町は昔は飲み屋街と遊郭の町だった。その基盤があったため、荒れた

環境にあった。子どもたちを変えることに取組を始めた。

・地域の方々も学校が町の誇りと言っておられる。

・小中一貫、連携校の難しさはあるが、カリキュラムをいかにつくるか、教職員の意識改革が重要な視点。

中高より小中が難しい。

・東北以外のすべての地域を勉強に行ったが、小中連携は意識されていない。

小学校の教育に尽きる。発達段階における学力をつける。

本当の意味で、小中一体になるとはそれぞれを無理にすり合わせるのではなくて、小学校でやるべきことをきっちりやるシステムが大切。

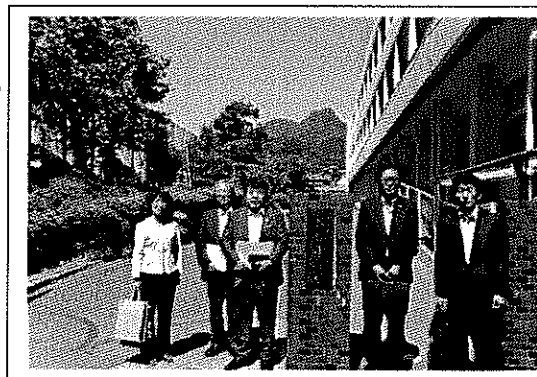
・平成24年4月に赴任してきた当時の課題は保護者や地域が学校に期待していないことだった。学校が地域の思いを理解していない。

学校が組織として機能していない。組織的な公務ができていない。責任ある仕事の仕方を教職員がわかっていない。学力をつけることをしていない。教育公務員であり越知町の職員として町のために貢献する意識がない。他の教科や仕事には口出ししない。

・学力や部活は地域の誇りにするしできて当たり前。小規模集落がたくさんあるので、地域に貢献する生徒を育てる。学校行事を地域や保護者が楽しみに。学力向上のために学校行事などは削減しない。越知町で受けられる教育を受けることをうりにしていこう。子どもたちに非行など問題が無いのは環境が良いからではなく、危機管理を徹底してやっているから。

県内外からの視察が多く、地域の人が越知町を誇りに感じ始めた。

・先生方がなくてはいけないことは、生徒の人格を豊かにし、世の中を生きていく社会的能力を高め、将来に対応できる学力・能力を育てることであり、教科書に書いてあることを切り売りする



ことではない。教科書に書いてあることを子どもたちに身につけさせるのは当たり前で、そこに書いてないけれども生活の中で使える能力をみがくこと。学習指導要領にも明記されていない。越知町はほっておけば無くなってしまいう地域。地域を豊かにするために学校として子どもたちをどう育てるか。町民の願いに敏感になる、どう子どもたちに結実させていくか。神輿も担げないので中学生が担ぐ。

当たり前をやればきちんと結果はついてくる。一生懸命やったけど子どもたちに学力がつかなかったのはうそ。教育ぐらい如実に成果がでるものはない。

- ・公務員的な体質をいかに払拭するか。教科担当が、責任をもって教科の学力を保障するため、他の先生の力を取り入れ組織を動かし利用する。オープンにし隠さない。失敗は良いが失敗を隠すことはだめ。責任をとる。チャレンジには失敗も多い。結果を出さない仕事は仕事ではない。出るように仕事をする。

- ・校長として各先生方に求める公務は「正しく目標を設定する能力」「目標の達成を見届けること」「先生方や良い手本となってほしい」

- ・県で自己目標シートをつくっており、勤務評定につながり、給与の上がり方も変わってくる。
- ・自分でたてる目標が3つある。ひとつは教育能力で教育の専門家として、各教科で活用能力を育てるためにどのように目標設定し取組むか。組織構造能力として組織が円滑に公務を遂行し効果をあげるために、どのように人間関係を築くのか。ヒステリックな人、協調性のない人が効率を下げる。職務能力として効率的に公務を遂行するため、どのように分掌業務を行うのか。職員会を基本的にしない。全体の校務を見て工夫する。

- ・学力をつけるのなら、学力をつけるだけの策をうたないとなかない。

学力を育てるための策。3年前に赴任してきたときは極めて学力が低かった。家庭学習だけで、一定の基礎がつくだけの宿題を出し続けなくてはならない。授業の中身はアクティブラーニング（課題解決学習）で行うが、定期考査を先生の育成に使う。

- ・定期考査は基礎的内容70%、活用的内容30%で作成する。通知表に7以下の成績がついている生徒はいない。

- ・定期考査問題は学期当初に作成し、内容を生徒保護者に周知する。

- ・宿題は毎日課題として英・数・国は毎日だされ、毎週課題として理・社は週末にだされるが、外部の人（2人）に宿題のまる付けを行ってもらい、出題問題に対する意見も出る。

- ・定期考査のシステムが学力をつけるためのシステム。定期テストを受けさせる以上、力をつけさせてから受けさせる。

- ・成績が上がったとき、一番喜んだのは先生。先生型は充実感や達成感があり、疲労感はない。教育長は最後の最後まであがいたものが結果をだす。あきらめたものため。県内の多くの学校は視察に来るが結果がでないとなげく。それは管理職が達成するまで見届けるかどうか。

## 【感想】

校長先生の話では、越智中の先生は越知町の職員である。自分たちの仕事は、越知町を豊かにすること、地域が誇りにする学校づくりしなければならない。以前は教育公務員（越智町の職員）としての意識の欠如だった。学校経営の方向性が定まっていなかった、教育委員会や町の方針を理解していない、なによりも地域の思いを理解していなかった。今、県内外からの多くの視察があり、地域の人々が越知町を誇りに感じ始めた。学校でもたくさんの観光パンフレットなど頂いた。

人間性、先見性、経済性これらを校務をとおして地域力として高めておられることに感動した。